

今日、お兄ちゃんが帰ってくる。

夜明けから心臓の音がうるさくて、ずっと落ち着かない。クロゼットの前で、もう三回も着替え直していた。

四月から社会人になって、都会で一人暮らしを始めたお兄ちゃん。たまに実家に帰ってくるその日は、大学生で実家暮らしの私にとって、カレンダーの中で唯一色づいた特別な日だ。

（——うーん……この白いブラウス、やっぱり地味すぎるかな）

二回目を選んだワンピースは、鏡に映る自分が「頑張ってる感」に溢れていて、気恥ずかしさに耐えきれず脱ぎ捨てた。三回目手に取った真っ白なニットは、あまりに「女」を意識しすぎた格好に思えて、気恥ずかしさから棚に戻した。

結局、一番シンプルな白いブラウスにデニムスカートという、いつもの自分に近い格好に戻ってきた。けれど、耳たぶにだけは、密

かに新調した小さなイヤリングを光らせている。

鏡の中の自分によく満足して、私は部屋を出た。

リビングに降りると、お母さんがキッチンで料理の仕込みをしていた。お兄ちゃんが帰ってくる日は、いつもテーブルに並ぶ品数が増える。その賑やかな香りに、私の心臓はさらにうるさく跳ねた。

「お兄ちゃん、何時に帰ってくるって？」

「昼前だって言ってたわよ」

あと一時間もある。

ソファに深く身を沈めて、意味もなくスマホの画面をスクロールさせた。けれど、文字はただの記号として滑り落ちていき、一つも頭に入っていない。

（——落ち着け。ただお兄ちゃんが帰ってくるだけなんだから。大げさだよ）

そう言い聞かせても、心臓の騒ぎは止まらない。

四年前に完膚なきまでに想いを碎かれてから、お兄ちゃんが帰ってくる日はいつもこうだ。朝から鏡の前で悩み、耳の奥まで響く鼓動に、どうしようもなく落ち着かなくなる。

お兄ちゃんが実家に顔を出すのは月に一、二回。そのわずかな時間だけが、私にとってこの一ヶ月を生き抜くためのすべてだった。

不意に、玄関のチャイムが鳴った。

心臓が跳ねた。反射的に立ち上がり、吸い寄せられるように玄関へ駆ける。

ドアを勢いよく開けると、そこには春の柔らかな日差しを背負ったお兄ちゃんが立っていた。薄手のジャケットに、少しだけ仕事の疲れが滲む表情。私と目が合った瞬間、彼は口角をわずかに上げて、ふっと小さく笑った。

「ただいま」

「おかえり！」

我慢できずに、そのまま彼に飛びついた。懐かしい香りに包まれ、胸に顔を埋めて、腕を背中に回してぎゅっと力を込める。お兄ちゃんは一瞬だけ身体を固めたけれど、すぐに慣れた手つきで私の頭をぽんと叩いた。

「離せ。暑苦しいぞ」

「やだ」

「重いつて」

「重くないもん！」

呆れたように笑いながら、肩を軽く押されて引き剥がされた。けれど、それでも離れたくない一心で、彼の腕にぴったりとぶら下がったまま見上げる。

「お兄ちゃん、髪切った？」

「……わかるか」

「わかるよ。似合ってる、かつこいい」

素直にそう伝えると、彼は照れくさそうに視線を逸らした。そんな反応さえ愛おしくて、靴を脱いで上がる彼に、密着したまま廊下を歩く。

「ねえ、お兄ちゃん」

「ん」

「大好き」

「はいはい、わかったから」

いつもの適当な返し。けれど、その温度感は私にとって、心地いいものだった。

「ねえ、ちゃんと聞いている!？」

「聞いてるよ」

「へへ。お兄ちゃん、大好き！」

「しつこいぞ」

突き放すような言葉とは裏腹に、私を振り払おうとする力はどこか弱かった。

リビングに入ると、キッチンからお母さんが顔を出した。

「律くん。おかえりなさい。仕事はどう？」

「ぼちぼちだよ」

「ちゃんと食べてるの？少し痩せたんじゃない」

「食べてる。最近忙しかったから」

お兄ちゃんの声が、ずっと切り替わった。私に向けるぶっきらぼうな口調から、穏やかな「長男」の声へ。その切り替えがあまりに自然で、胸の奥が少しだけ疼いた。

三歳でこの家にやってきてから、もう十五年。血の繋がらない義兄妹という関係は、いつの間にか当たり前になっていた。けれど、彼が母親に向けるその「いい子」な顔は、どこか役割を演じているようで、私には届かない場所にある気がする。

私と二人きりになると、口が悪くて、素っ気なくて、いつも「ばーか」って軽くあしらわれてしまう。けれど、そんな不器用な素顔を見せてくれるのは、世界中で私だけだ。私は、そっちのお兄ちゃんの方がずっと好きだった。

リビングのソファに並んで座ると、私は吸い寄せられるようにお兄ちゃんの方へと体を寄せた。腕と肩、太腿が触れ合うほどの距離。お兄ちゃんがちらりと横目で私を見て、ふっと溜息を吐いた。

「お前、本当に学習しねえのな」

「学習って、何を？」

「いいから、少し離れろ」

「やだ」

それ以上は言われなかった。彼は諦めたようにテレビのリモコンに手を伸ばし、電源を入れた。とりとめのないバラエティ番組が流れ始める。

私は彼の肩に、こてんと頭を乗せた。またちらっと見られたけれど、今度は突き放されなかった。

（――今日は、許してくれた）

心の中で、小さくガッツポーズをする。

四年間、ずっとこうだ。好き好きアピールをして、冷たく突き放されて、それでもしがみついて、たまに許してくれる。その繰り返しで、私は今日まで、この距離を繋いできた。

昼前に、お母さんが「ご飯できたわよー」と声を上げた。

お兄ちゃんがすぐに立ち上がったので、その後ろにくっついてダイニングに移動した。

ダイニングテーブルには、朝からお母さんが仕込んでいた料理が並んでいた。煮魚、煮物、サラダ、お味噌汁。

「律くん、最近忙しいの？」

「まあ、それなりに」

「今度の連休はどうするんだ」

「……まだ決めてないよ」

お父さんが横から口を挟むと、お兄ちゃんは穏やかな声で丁寧に答えた。完璧な長男の顔だった。

私はお兄ちゃんの隣に座って、少し椅子を寄せる。腕が触れるくらいの距離。私がただのお兄ちゃんっ子だと思い込んでいる両親は、特に気にした様子もない。

けれど、触れた瞬間に彼がわずかに肩を強張らせたのが分かった。お兄ちゃんは自然に私との距離を開けた。

(……お兄ちゃん……?)

その小さな拒絶に、胸の奥がチクリと痛んだ。

二人の間のそんな空気には全く気づかないまま、お母さんがふつと笑って話を振ってきた。

「本当に律くんが大好きねえ。いつまで経っても甘えん坊さんなんだから」

「だって、お兄ちゃんかっこいいんだもん」

いつもの「妹」の仮面を被って、わざとらしく笑う。

「ふふ、まあいいけど。あなたももう大学二年生になったんだから、そろそろお兄ちゃん以外の男の子にも興味を持つ頃じゃない？」

「……別に。興味ないよ」

「そう言わずに。一人くらいいてもいいじゃない」

「いない」

食卓に流れた軽い空気。お父さんも、お母さんの冗談に合わせるように口角を上げた。

「お母さんも、君がいつまでも律にべったりだから心配してるみた
いだな」

「べったりじゃないもん。……お兄ちゃん以上にかっこいい人ない
だけー」

冗談めかして反論しながらも、私は視線をお兄ちゃんに向けたけど、お兄ちゃんは隣で煮物を口に運びながら、涼しい顔をしていた。

（全然興味ないんだもんなあ……）

ご飯はそのまま和やかに進んだ。

皆が食べ終わった頃に、お母さんがコーヒーを淹れに立ち上がった。お父さんも「先に風呂入ってくる」と席を立った。

ダイニングには、私とお兄ちゃんの二人だけになった。

——その瞬間、お兄ちゃんがふうと長いため息をついた。

「……お前」

「ん？」

「いい加減にしろよ」

キッチンのお母さんに聞こえないよう小声だったが、明らかに声のトーンが変わっていた。穏やかな長男から、二人きりの時の口調に。

「何？」

「……あんまりくっつくなんて言ってるだろ」

「別にあれくらい普通でしょ。妹だし？」

「……お前な」

また、長く息を吐いて、お兄ちゃんは視線を逸らした。

「お前、彼氏作れよ」

（――来た）

「いらないうって言ってるじゃん」

「何だよ。大学なんていくらでも男いるだろ」

「お兄ちゃん以上の人、いないよ」

わざとらしく甘える口調を捨てて、真っ直ぐに彼を見た。

「……いくらでもいるだろ」

「……いないよ」

そのまま彼をじっと見つめる。

お兄ちゃんが、気まずそうに視線を逸らした。

そのわずかな隙に、私はまたいつものように明るく笑いかけた。

「お兄ちゃんだって、彼女作ってないでしょ？」

「……俺は仕事忙しいんだよ」

「私も大学忙しいもーん」

「言ってる」

お兄ちゃんがふいっと顔を背けた。

その横顔を見ながら、私はわざとらしくお兄ちゃんの顔を覗き込んだ。

「ねえ、お兄ちゃん」

「何」

「もう諦めて私と結婚すればいいのに」

冗談っぽく笑って言うとお兄ちゃんが、呆れ果てたでもいう

ように目を細めた。

「なんでそうなる」

「やだ？」

「ガキみたいなこと言ってるなよ」

「子供じゃないし、もう二十歳だし」

「言ってることがガキだって言ってるんだ」

「だって、私はお兄ちゃんが――」

言葉を重ねようとした瞬間、お兄ちゃんがこちらを睨みつけながら、遮った。

「いい加減にしろよ。四年前に言っただろ」

伝えたい言葉が、口の中で苦く溶けていき、心臓のあたりがぎゅつと締め付けられた

何か言い返そうとするけれど、喉の奥で言葉が詰まってすぐには

出てこなかった。

「お待たせ！ コーヒー淹れたわよー」

お母さんが、湯気の立つカップを二つ持ってダイニングに戻ってきた。

さっきまでの張り詰めた空気が、一瞬で霧散する。

「ありがとう、母さん」

お兄ちゃんはすぐに「完璧な長男」の顔に戻り、お母さんが差し出したカップを受け取った。

私は、自分の前に置かれたコーヒをゆっくりと啜る。

（……苦い）

胸の奥の軋みは、誰にも聞こえないところで、ずっと残っていた。

夜、お風呂を済ませて部屋に戻った。

電気はつけず、そのままベッドに倒れ込む。窓の外は深い闇に塗り潰され、カーテンの隙間から漏れ出す街灯の光だけが、冷たく部屋の輪郭をなぞっていた。

壁一枚を隔てた向こう側に、お兄ちゃんがいる。

お母さんが「久しぶりだから泊まっていきなさい」とせかしたからだ。

天井を見上げたまま、私は動けなくなっていた。

静寂の中で、昼間の「四年前に言っただろ」というお兄ちゃんの突き放すような声が、耳の奥で何度も何度も執拗にリフレインしていた。

(……言われなくなつて……忘れるわけじゃないじゃない……)

ゆっくりと目を閉じた。思い出したくないのに、四年経っても消えない記憶が、心臓を締め付けるように勝手に再生されていく。

——あの夜、私は中学三年生だった。

お兄ちゃんが大学進学で家を出ると決まったのはその半年ほど前で、その間に私は覚悟を決めていた。最後に一回だけ、ちゃんと言おう。言わずに見送ったら、絶対に後悔するから、と。

だから、私は引越しの直前にお兄ちゃんを呼び出した。「最後に二人で散歩しよう」って嘘をついて、家から歩いて十分の展望台に。丘の上の小さな公園。ベンチが二つと低い柵。地元の人しか来ないような場所。

——私とお兄ちゃんの場合。

夜風が髪を揺らしていた。街の灯りがぼつぼつと見えた。橙色の街灯、白い窓の明かり、遠くの幹線道路を流れるテールランプ。物

心ついた頃から、何度もお兄ちゃんと並んで見てきた景色。

心臓がばくばくと痛いくらいに鼓動を鳴らし、喉はからからだった。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「……あのさ」

声が震えた。お兄ちゃんが柵に肘を預けたまま、ゆっくり顔をこっちに向けた。

「どうした」

その声があまりにも優しく、なんだか泣きそうになった。

爪を掌に食い込ませて、その痛みで、なんとか自分を保った。

「私……お兄ちゃんが好きなの。家族としてじゃなくて」

ついに、言ってしまった。

お兄ちゃんの表情が凍りついた。夜風だけが二人の間を冷たく通り抜けていく。私は俯いたまま、彼の靴の先だけをじっと見つめていた。

長い沈黙。

やがて、お兄ちゃんが口を開いた。

「……お前……何……言ってるんだよ」

少しだけ低くなった強張ったような声。

「俺たち兄妹だろ」

「血、繋がってないもん」

「それでも家族だ。お前が三歳の時から、ずっと兄妹として一緒に育ってきただろ」

穏やかで、優しい声。いつもの、完璧な兄の顔。その不自然なまでの穏やかさが、逆に恐ろしかった。

「お兄ちゃん」

「ん」

「……一回も、ない？私のこと、女として見たこと」

意を決して顔を上げる。けれど、その瞳に私が探していた答えはどこにもなかった。

「ない」

残酷なまでに、即答だった。

「あるわけないだろ。お前のことは、ずっと妹としか見てない」

「……っ」

「中学生だろ。そういう時期もあるかもな。でも、勘違いだっ」

「勘違いなんかじゃ——」

「勘違いだ」

言葉を被せられ、私の声はかき消された。

「それに、俺に恋人いるの、お前も知ってるだろ」

知っていた。知っていて、ずっと目を逸らしてきた事実だった。

「明日から離れて暮らす。お前も高校生になるんだから、色んな出会いはあるよ」

「……お兄ちゃん」

「家族の好きと、そういう好きは違うんだ。今はわからないかもしれないけど、いつか分かる日が来る」

それは、兄が妹に言い聞かせるような、あまりに悲しい正論だった。

「俺はお前の兄貴で、これからずっと兄貴だ」

その言葉が決定打となって、ぱきっと何かが碎けた。我慢しようとしたのに、涙が溢れて止まらなかった。

「……っ」

私は何も言わずに展望台を駆け下りた。背後でお兄ちゃんが何かを言った気がしたけれど、もう聞こえなかった。聞きたくなかった。夜の坂道を、何度も転びそうになりながら走り抜けた。

翌朝、お兄ちゃんはいつも通りの「兄」の顔で、「行ってくる」と言って家を出た。私は、いつも通り「行ってらっしゃい」と返した。

何事もなかったみたいに。全部、なかったことにしたみたいに。

目を開けると、そこには暗い天井が広がっていた。大学二年生になった私の部屋。

頬が濡れていた。手の甲で拭いたけれど、じわりと熱い。

（――……まだ、泣くんた）

四年経っても、あの夜を思い出すと勝手に涙が溢れてくる。

馬鹿だ。本当に馬鹿だ。

お兄ちゃんはその夜、はっきりと言った。「ずっと妹としか見えない」「恋人がいる」「家族の好きとそういう好きは違う」。残酷なほど、はっきりとした拒絶。

なのにこの四年間、ずっとお兄ちゃんが帰ってくる度に、軽い好き好きアピールでお兄ちゃんを困らせ続けてきた。わざと軽く、冗談みたいに。本気で伝えて、また本気で振られるのが怖かったから。そうしたら、お兄ちゃんも「ばーか」で済ませてくれる。完全には拒絶されない。

（……でも、お兄ちゃんも忘れてないんだ……）

さっきの牽制するような言葉。

本気で言えば、四年前みたいにまた碎かれるのだろう。

壁の向こうに、お兄ちゃんがいる。手を伸ばせば届く距離に。でも本当の意味では、四年前からずっと、手の届かないところにいる人。

（——お兄ちゃん）

心の中だけで呼んだ。

今本気で「好き」って言ったら、何て返されるだろう。たぶんまた「ばーか」で済まされる。もう四年前みたいにはつきり振ることさえしないと思う。私のアピールを「子供の遊び」として受け流すことに、お兄ちゃんとはつくに慣れてしまったから。

子供の遊びとしてあしらわれ続けるか、本気で言ってもう一度碎かれるか。

どっちにしても、救いなんてない。

涙がもう一度こめかみを伝って、枕に吸い込まれた。

声は出さなかった。出すと、壁の向こうにいるお兄ちゃんに聞こえてしまうかもしれないから。

翌朝、お兄ちゃんは昼過ぎにマンションへ帰っていった。

両親と三人で玄関まで見送る時、お兄ちゃんはいつものように「またな」と短く言い、私も「うん、またね」と笑って返した。

普通に笑えた。普通に手を振れた。

けれど、ドアが閉まった後に訪れた静けさだけが、心にずしりと重くのしかかった。

その翌週の土曜、大学のサークルの集まりがあった。

普段は二ヶ月に一度くらいのペースで十人前後が集まるゆるい会で、幹事の沢渡先輩がグループラインで呼びかけていた。私は毎回参加したりしなかったりと、その時の気分で決めている。

『今週土曜、十八時から駅前の居酒屋で。十人くらい集まる予定です』

送られてきたお店の情報を見た瞬間、ふとお兄ちゃんの顔が浮かんだ。

（お兄ちゃんのマンション……確かこの近くだっけ）

一度だけ、お母さんと一緒に訪れたことがあったが、それもずいぶん前のことだった。

お兄ちゃんを思い出すと、胸の奥がまたじりじりと疼き出す。

（……誰かと騒いでいれば、少しは気も紛れるかな）

私は少し悩んだ後、「行きます」と返信した。

土曜の夕方、白いブラウスにデニムスカートを合わせて支度を整え、家を出た。

居酒屋に着いたのは約束の五分钟前。店の前には沢渡先輩が一人で立っていた。

「あ、来たね」

「お疲れ様です。皆さんはまだ？」

先輩が少しだけ困った顔をした。

「それがさ、急にドタキャンとかもあって。今のところまだ俺と君だけなんだよね」

「え、そうなんですか」

「あと数人は来るって言ってたよ。ちょっと遅れるみたい。先入って待ってよう」

「……はい」

違和感があった。あったけれど、強く断ることはできなかった。ここで「やっぱり帰ります」と言うのは目の前の先輩に失礼な気がしたからだ。

予約席に通されると、掘りごたつ式の四人席で向かい合って座った。

「とりあえず何か頼もうか」

そう促されて料理を二、三品と飲み物を頼み、私はウーロン茶にした。

穏やかに会話が続いた。サークルの話、課題の話、就活の話。先輩は至って普通の先輩で、変なことは何も言わなかった。

けれど三十分経っても、誰も来なかった。

「……まだ来ないですね」

「ほんとだね」

先輩がスマホを取り出して確認し、どこかわざとらしく息を吐いた。

「うわ、最悪。結局皆キャンセルだつてさ。通知切ってたから気づかなかった」

見せられたスマホの画面には、メンバーの何人かが「ごめん、行けない」と書き込んでいた。私も自分のスマホを開いて確認すると、確かに同じやり取りが並んでいた。

「すみません、私も気づいてなくて」

「いやいや、幹事なのに悪いね」

胸の奥がざわついた。誰も来ない。サークルでも軽いと噂の先輩と、二人きり。

それでも「帰る」とは言えなかった。今さら先輩を一人にするのは申し訳ないという、生真面目な思いが私をその場に留まらせてい

た。

「まあ、せっかく来たんだし、もう少し飲んでいこうか」

「……はい」

そう言って、先輩が二杯目のビールを頼んだ。

「ウーロン茶ばっかでつままないでしょ。一杯くらい飲もうよ」

「あんまりお酒強くないので」

「弱いのか？じゃあこれ、甘くて飲みやすいやつ」

カシスオレンジを指差された。断り続けるのも気まずくて、しぶしぶ頷いた。

運ばれてきたグラスを先輩が受け取り、渡してくれた。軽く乾杯し、一口飲んでみる。甘くて、確かに飲みやすかった。

けれど半分ほど飲んだ頃、頭の奥がぼんやりし始めた。

（……あれ）

おかしかった。半分しか飲んでいないのに、酔い方が普通と違う。頭がふわっとするのではなく、身体の芯からじわりと熱が上がっていくような不思議な感覚。

(……これ、変だ)

「あれ、顔赤いね」

先輩がふっと笑った。

「やっぱり弱いんだ」

「……すみません……ちょっと、回ってきたかも」

(いつもは一杯くらいなら平気なのに……)

「大丈夫？ 水もらおうか」

言いながら先輩が立ち上がり、私の隣の席に移動してきた。肩が触れ合うほどの至近距離に座られた。

「え——」

「酔った時は横になれる場所に行ったほうがいいよ。俺の家すぐ近くだから、ちょっと休んでから帰りなよ」

「あ、いえ、大丈夫です。自分で帰れます」

「無理だよ、その状態で。ね、いいから」

テーブルの下で、先輩の手が私の太腿に置かれた。

背中に冷たいものが走り、心臓の鼓動が早くなる。

——おかしい。ただの酔いじゃない。この身体の熱さと、不自然なほどの倦怠感。それに、この状況。

（……もしかして、飲み物に何か入れられた？）

そんな不安が頭をよぎった瞬間、先輩の指先がゆっくりと太腿を撫で上げた。

ただの介抱にしては、距離が近すぎる。

動けなくなった私を、そのままどこかへ連れて行こうとしている

のではないか。得体の知れない恐怖が、熱に浮かされた頭の中で渦巻いた。

手が震えそうになり、慌てて拳を握りしめた。

「……すみません、お手洗いだけ行かせてください」

「うん、行っておいで。戻ってきたらタクシー呼ぼう」

肩にかかった先輩の手をそつと外して立ち上がると、足元がふらついた。バッグを強く掴み、一歩ずつ必死にトイレへと向かった。

個室に駆け込んで鍵を閉めると、そのまま便座に崩れ落ち、震える両手で口を覆った。

（どうしよう）

心臓が早鐘のように激しく鳴り響き、身体のコから沸き上がる熱

がじわりと全身に広がる。頭は熱に浮かされたようにぼんやりとして、時折、視界が二重に滲んで焦点が合わない。

店員さんに助けを求めるべきかと考えたが、今の私にはそんな余裕なんてなかった。身体を支配する熱のせいで思考がまとまらず、誰に何を伝えればいいのかさえ分からない。

震える手でスマホを取り出すと、明るい画面の光に目が眩み、文字が白く滲んでうまく読み取れなかった。

けれど、考えるよりも先に指が動いていた。連絡先リストの、いつもの位置にある名前を記憶を頼りにタップして、そのまま通話ボタンを押す。

数コール後、耳に届いたのは、素っ気ない、いつもの声だった。

『――どうした』

その低い響きを聞いた瞬間、不意に目の奥が熱くなった。

「……お兄ちゃん」

そう呼びかける声が震えているのが自分でもわかった。

「助けて」

お兄ちゃんが一瞬、息を呑んだのがわかった。

『——何があった』

少しだけ間が空いた後、声のトーンが変わった。素っ気なさはあるが、どこか切迫した、聞いたことのない響き。

『今、どこだ』

店の名前と駅、そして入り口の目印。必死に伝えようとするが、言葉がうまくまとまらず、たどたどしく口にした。お兄ちゃんはそれを、すべて静かに聞き届けていた。

電話の向こうでお兄ちゃんが、ふう、と長く息を吐いたのが聞こえてきた。

『……今、どこにいる』

「……トイレの、個室」

『すぐに行くからお前はそこから動くな。鍵は閉めたか』

「……うん」

私の安全を確認した彼が、続けて低く、どこか苛立ちを含んだ声で問いかけてきた。

『……誰といたんだ』

「……サークルの、先輩と」

『何かされたのか』

「……飲み物に、たぶん、何か入れられたっぽい」

『どれくらい飲んだ』

「半分くらい」

電話口の向こうから、低く鋭い舌打ちが聞こえた。

『——すぐ行く』

通話が切れた。

スマホを握りしめたまま、便座の上で身体を丸める。

ちやうどこの駅の近くにマンションを借りていると聞いていたけれど、まさかこんな形で会うことになるなんて。どんな顔をして会えばいいのか、何を話せばいいのか、何もわからない。

それでも、今の私の頭の中にある「来てほしい人」は、お兄ちゃんしかいなかった。

そして、十分ほど経った頃——手元のスマホが短く震えた。画面に浮かんだのは、お兄ちゃんからの簡潔なメッセージだった。

『着いた。出てこい』

弾かれたように立ち上がったが、足元はまだひどくふらついている。バッグを掴んでドアの鍵を開け、壁に手をつきながら、意識を

繋ぎ止めるようにして廊下を歩いた。

店の出入り口の方に目を向けると、そこにはお兄ちゃんが立っていた。薄いジャケットを羽織ったまま、じっとこちらを見ている。

目が合った瞬間、張り詰めていた何かが一瞬と緩んだ。

私は崩れ落ちそうになる膝に力を入れて、出口に向かってふらふらと歩き出した。席の方を振り返る余裕なんてなかった。先輩が立ち上がって何か言った気がしたが、耳には届かなかった。

お兄ちゃんが一歩踏み出して、私の腕を強く、けれどどこか気遣うように引き寄せた。

「お兄ちゃん——」

「……大丈夫か」

低い声だった。けれど、そこには隠しきれない安堵が滲んでいた。私の腕を掴んだまま、お兄ちゃんは私を背後に隠すようにして、

追いかけてきた先輩の方へ向き直る。

先輩はまだ状況が飲み込めていないのか、半笑いを浮かべたままだ。

「あの、どちら様……」

「こいつの兄だ」

短く、冷ややかな声。その響きだけで、先輩の半笑いが一瞬で凍りついたのがわかった。

お兄ちゃんは淡々と、けれど逃げ場を塞ぐように言葉を続けた。

「で。お前か、妹の飲み物に薬を入れたのは」

「え、いや、そんなこと——」

「とぼけんなよ」

言葉を遮り、鋭く被せた。声を荒らげてはいない。けれど、低くて静かなその声が、店内の空気を一気に凍りつかせた。

「妹が震えながら電話してきたんだよ。お前から渡された酒を半分飲んだら身体がおかしくなった、って。お前以外に誰がやるんだよ」

「いや、それは誤解で」

「誤解か」

ふっと笑った。でも目は笑ってなかった。

「じゃあテーブルのグラス、調べさせろよ。誤解なら何も出ねえだろ」

先輩が何も言い返せなかった。顔が青くなっていた。

お兄ちゃんが一步近づいた。先輩より頭一つ分背が高い。見下ろす形になった。

「お前さ」

さらに低い声。

私の腕を掴むお兄ちゃんの手に、ぐっと力がこもった。

「妹に何かあったら、殺すからな」

先輩が息を呑む音が聞こえた。お兄ちゃんが放つ、刺すような殺気に、私も思わず身をすくめた。

「警察呼ぶのと、こいつの前から一生消えるのと、どっちがいい？
選べよ」

先輩が、ひどく狼狽して口をパクパクとさせた。その情けない姿が、葉でぼやけた視界の中で、どこか遠い出来事のように感じられた。

「……警察だけは……」

先輩が消え入るような声で答えた、その瞬間だった。

鈍い音がして、先輩の顔が大きく歪んだ。

お兄ちゃんの拳が、先輩の頬に深くめり込んでいた。

殴った後、お兄ちゃんはすぐに拳を下ろした。けれど、その拳はわずかに震えている。

「今日はこれで帰る。妹もこれ以上騒ぎにしたくないだろうからな」

低く、押し殺した声。

「でも覚えとけよ。次、お前がこいつの前に現れたら、警察じゃ済まさねえからな。サークルも辞めろ。連絡先全部消せ。グループラインからも今夜中に抜ける」

お兄ちゃんは返事を待たずに私の腕を引いた。

店を出て、夜の冷たい空気が頬を打つ。大通りまで歩かされ、彼が片手を挙げてタクシーを停めた。

「乗って」

促されるままに後部座席へ乗り込む。お兄ちゃんが続いて乗り込

み、ドアが閉まった。

密閉された車内。お兄ちゃんが運転手に住所を告げた。聞いたことのない地名。実家じゃない。

（お兄ちゃんのマンション……？）

タクシーが夜の街を走り出した。車内は重い沈黙に包まれている。お兄ちゃんは窓の外をじっと見ていた。けれど、私の腕を掴んだ手だけは、ずっと離れなかった。強くも弱くもない。ただ、絶対に離さないという意味だけが、その熱から伝わってきた。

十分ほどで、静まり返ったマンションの前に着いた。

エントランスからエレベーター、そして廊下まで、道中はすべて

無言だった。けれど、お兄ちゃんの手はずっと私の腕に回されたままで、その体温だけが薬への心細さを和らげてくれた。

部屋の前で鍵を回し、暗い室内へ先に入ったお兄ちゃんが玄関の電気をつける。そのままリビングまで通されると、間接照明がぼんやりと点る、生活感の薄いシンプルな部屋が広がっていた。本棚にソファ、ローテーブル。

ソファの前に辿り着いて、ようやく腕を離された。

「座れ」

ぶつきらぼうに促され、そのまま座らされる。お兄ちゃんはキッチンへ向かうと、水を入れたコップを持ってきて私の前に置いた。

「ゆっくりでいいから全部飲め」

「……うん」

一口飲むと、冷たい水が熱を持った喉を滑り落ちていく。けれど、

その冷ややかささえも、体の奥からじわじわと広がっていく熱を消し去るには足りなかった。

お兄ちゃんが私の前にしゃがみ込み、目線を合わせて覗き込むように聞いた。

「……体、どこかおかしいとこないか」

「……さつきから……っ、なんだか……熱くて」

熱い、と口にした途端、お兄ちゃんの瞳に鋭い色が混じる。

「あいつに……触られたのか」

「……うん……肩と、太もも。でも……すぐ逃げたから」

お兄ちゃんがほっとしたように、息を吐いた。その安堵したような表情に、私の胸が締め付けられる。

「飲んだのは半分くらいって言ってたよな？」

「うん」

「気持ち悪くないか。吐きそうとか」

「……うん。なんだか……その……んっ、熱いだけ……」

下腹部のあたりがじわじわと疼き、思考が甘く溶けていく。じつとしていられないような、落ち着かない熱が体の芯から広がっていた。

「……そうか」

それ以上は追求しなかった。立ち上がったお兄ちゃんが、ソファの背もたれに片手を置く。

「……なんで二人きりで居酒屋なんか入るんだよ」

呆れたような、けれど心配が滲んだ声。私は膝の上に置いた自分の手をぎゅっと握りしめた。

「……他のメンバーも来るって聞いてたから」

「来てなかっただろ」

「途中でみんなキャンセルってことになって……」

「その時点で帰れよ」

「……失礼なっと思って」

言い訳を口にしながらも、視線はお兄ちゃんの指先に吸い寄せられていた。節くれだった、男らしい綺麗な指。どうしてだか、あの指に触れられたら、この疼きは消えてくれる気がした。

（やだ……私ったら……何考えて……）

「お前のそういうところ、本当にいい加減にしろ」

呆れたような声に弾かれ、我に返る。お兄ちゃんはソファに腰を下ろしたが、私の隣ではなく、わざと少し距離を空けた。その距離が、今の私にはひどく遠く感じて、胸の奥がキュツとなる。

私は逃げるように水を飲んだ。けれど、震える手で持つコップがカチカチと音を立て、水面が小刻みに揺れている。

それに気づいたお兄ちゃんが、何も言わずに手を伸ばしてきた。
大きな手が私の指先に触れ、そのままコップをすっと取り上げる。
一瞬だけの接触だったのに、触れられた場所から熱が広がっていく。
彼はそのまま、コップをテーブルに置いた。

「寢室貸す。葉抜けるまで寝とけ」

「……お兄ちゃんは？」

「ソファで寝る」

短く切り捨てられた言葉に、素直に頷くべきだった。けれど、お兄ちゃんが立ち上がりとした瞬間、反射的にその服の裾をぎゅっと握りしめていた。

動きを止めたお兄ちゃんが、冷ややかな視線で私を見下ろす。けれど、私の熱を帯びた視線に気づいた瞬間、ふいっと目を逸らした。
「行かないで」

絞り出した声が、情けなく震えた。

「……」

「ここにいて」

「……いいから、寝ろ。話は明日だ」

そう言っただけ放す声は、どこか余裕がない。単に私の意識が朦朧としているからではない。この疼きが何を意味するのか、お兄ちゃんだって薄々気づいているはずだ。

「明日まで、待てないよ」

薬のせいなのかそうじゃないのかは、もはやどうでもいい。

今、私が欲しいのは、お兄ちゃんだ。

「……いいから寝ろ。お前、自分が何言ってるか分かってねえだろ」

「わかってる。ちゃんと、わかってるよ……?」

拒絶されるのが怖くて、服の裾を握る手にさらに力を込めた。
意識はまだ朦朧としていて、視界がたまに二重に揺れる。けれど、
心だけは残酷なほどクリアだった。

頭の片隅で、これは薬のせいだ、明日の自分はきっと後悔する、
という冷静な声が響いた。けれど、それすらもうどうでもよかった。
この熱を鎮められるのは、世界中でお兄ちゃんだけなのだから。

「お兄ちゃん」

「……何だよ」

「慰めて」

不意に投げかけた言葉に、お兄ちゃんの肩がぴくつと跳ねた。

「は？」

「おさまらないの。身体が、ずっと疼いて……」

「だから寝ろって言って——」

「寝るだけじゃ、足りない」

立ち上がった拍子に足元がふらついた。反射的に伸びてきたお兄ちゃんの手を両手で掴み、そのまま自分の頬に押し当ててみる。

「……お兄ちゃんの手、あったかい」

「お前、本当に何言ってるんだ」

低くなった声が耳に届く。けれど、振りほどかれなかった。その手の熱を頬に感じたまま、じっと見上げる。

「お兄ちゃん」

「ん」

「抱いて」

お兄ちゃんが息を呑んだ。一瞬だけ視線を逸らし、それから口を開く。

「……お前、薬でおかしくなってるんだよ」

いつもの呆れた口調。けれど、その声はどこか余裕がなさそうに震えていた。

「本気だよ？」

自分からその胸に身体を預けた。すぐには腕を回してこず、両手が空中で止まったまま固まっている。

「ずっと本気だよ。お兄ちゃんが知らないフリしてただけ」
胸に頭を押し当てると、心臓の音が聞こえた。少し速い。

「四年前のあの時も本気だった」

何も言い返されなかった。長い沈黙が降り積もる。やがて、背中に片手が回ったが、それは抱きしめるためではなく、肩を掴んで距離を取らせるためのものだった。

目の高さで、向き合わされる。

「……薬のせいで人恋しくなってるんだよ。寝たら治る」

「違う」

即答した。

「明日には覚えてない」

「覚えてるよ……！」

彼の胸ぐらを掴むようにして、必死に訴える。

「……今日だけでいいから。お兄ちゃん、私のこと振っていいよ。」

明日、振ってくれていいから。でも今夜だけは……お願い、抱いて」

お兄ちゃんの目が揺れた。怒りなのか、呆れなのか、それとも――判別できなかった。

思考が追いつく前に、私はお兄ちゃんの首に両腕を回した。背伸びをして、自分から唇を重ねる。一瞬触れるだけの、浅いキス。避

けられなかったけれど、応えてもこなかった。

唇を離して見上げて、お兄ちゃんは何も言わない。

「お兄ちゃん……好き。もう、我慢できない……お腹の奥が疼いて仕方ないの」

もう一度、背伸びをした。今度は逃がさないように、唇を深く押し当てる。

「……お兄ちゃん……助けて」

キスの合間にそう懇願すると、お兄ちゃんの身体がびくりと跳ねた。

その瞬間、腰に強い力がかかる。引き寄せるように、骨が鳴るほど強く。

「……知らねえからな」

耳元で低く囁かれた言葉を最後に、後頭部を大きな手にガシリと

掴まれた。

そのまま強引に顔を向けられ、唇が塞がれる。

「……んんっ」

さっき私からしたキスとは、全く違った。

暴力的なまでの力強さで押し付けられた唇から、熱い吐息が流れ込んでくる。後頭部を固定する手に力が入り、逃げられないように深く、深く、口内を蹂躪された。

「んっ……♡」

唇の隙間に潜り込んできた舌が、私の舌を強引に絡めとる。驚いて口を開けた隙に、さらに深く、奥に侵入してくる。

ちゅぷ……♡じゅる……♡

「ん……♡んむ……♡」

息ができなかった。鼻から短く吸う間もなく、また塞がれる。お

兄ちゃんの片手が腰を、もう片方の手が後頭部をしつかりと押さえていて、逃げ場なんてどこにもなかった。

じゅるる……ちゅる……♡

舌を絡められて、吸い上げられて、角度が変わるたびに口内を隅々まで貪られる。

（お兄ちゃんと……キスしてる……恋人みたい……）

そう思った瞬間、下腹部の疼きが跳ね上がった。薬のせいで火照った身体に、お兄ちゃんの指先や体温が触れるたび、甘い痺れが走る。お腹の奥がじゅくじゅくと溶け出して、どうしようもなく熱い。

「ふ……っ♡ん……♡」

膝の力が抜けた。お兄ちゃんの腕がなければ、そのまま崩れ落ちていたと思う。腰に回された手に力が入り、ぐっと引き寄せられた。密着した身体越しに、お兄ちゃんの心臓の音が伝わってきた。速か

った。私と、同じくらい。

(……ずっと……欲しかった……)

唇が離れたとき、銀色の糸が引いた。

お兄ちゃんが私を見下ろしていた。肩で息をするほど乱れているのに、無理に冷徹な仮面を被ろうとしているみたいだった。その瞳は鋭くて、私を値踏みするように射抜いているけれど、どこか焦燥が混じっていて、余裕なんてなさそうに見えた。

けれど、私の腰を掴む指先がわずかに震えている。

「……ベッド、行けるか」

低く響いた声は、いつもの突き放すような口調ではなく、どこか静かで平坦だった。

うまく声を出すことができず、私はただ頷く。

腰に手を回されたまま寝室へ連れていかれると、そこには薄暗い

部屋にベッドが一つだけ、お兄ちゃんらしく一点の乱れもなく整えられた白いシーツが広がっていた。

ベッドの縁に座らされると、お兄ちゃんは立ったまま、上から私を見下ろしていた。

「……最後に……もう一度だけ聞く」

低く、有無を言わせない響きに、私は小さく首を傾げた。

「後悔しないか」

「……するわけないよ。だって、お兄ちゃんのこと……欲しくてたまらないの……」

「それは、葉のせい——」

「いいよ、葉のせいにして。葉で苦しむ私を助けるためにお兄ちゃんは私を抱くの」

「……っ」

「ここ……」

そう言って、震える指先でデニムスカートの裾を捲り上げた。下着はとうにぐっしりと濡れ、太ももにまで熱い雫が伝っている。私はお兄ちゃんの手を強引に引き寄せ、その大きな掌を、一番熱くて疼いている秘部へ押し当てた。

「……んっ、あ……」

指先が触れただけで、身体が跳ねる。

「苦しいよ……お兄ちゃん、助けて……」

涙で視界が滲む。縋り付くように見上げると、お兄ちゃんの瞳に、ついに理性の堤防が決壊したような激しい色が混じった。

「……っ、もういい」

低い唸り声と共に、視界が反転する。ベッドに押し倒された衝撃で、シーツが乱れた。

お兄ちゃんは私の脚を強引に割り、その間に潜り込む。

「……っ♡」

不意に、熱い吐息が太ももの内側に触れた。そして、濡れそぼった下着越しに、熱い舌がぐいっと押し当てられ

「……ひゃ!？」

意識が白くなるほどの刺激に、背中がピンツと弓なりに跳ねた。下着のクロッチ部分が、お兄ちゃんの舌先で強引に押し広げられる。ぐしょぐしょに濡れた布地が肌に張り付き、その隙間から熱い吐息が直接、一番敏感な部分に吹きかかる。

（……こんな場所……）

そのまま、お兄ちゃんは私の脚をさらに左右に割り、ずり上がったスカートと濡れた下着を乱暴に引き摺り下ろした。

ひやりとした空気に触れた途端、またじんじんと熱い疼きが暴れ

出す。

目の前には、私の濡れそぼったはしたない秘部を見つめるお兄ちゃんの顔があった。

——暗く深い色をした瞳。

「……んう、お兄ちゃん……っ♡」

恥ずかしさで顔を覆うけど、お兄ちゃんは止まらなかった。

お兄ちゃんの熱い舌先が、じわりと蜜を湛えたそこへ、吸い付くように触れた。

じゅるるる……♡♡

「ひゃあっ♡♡あ……あ、ああっ♡♡」

電撃のような快感が全身を駆け巡る。お兄ちゃんの舌は、容赦なく、それでいて丁寧に、私の恥ずかしい場所を舐めあげる。

葉のせいで敏感になりすぎた身体が、お兄ちゃんの舌の動き一つ

ひとつに過剰に反応してしまう。じゅるる……と卑猥な水音が耳に届くたび、腰が勝手に浮き上がり、彼の顔を求めるようにゆらゆらと揺れる。

「あつ、おにい……ちゃ……♡♡そこ……はあん♡♡♡」

お兄ちゃんは何も答えない。ただ、私の反応を確認するように、舌の動きを速めた。

ぐちゅ、ぐちゅ、と粘膜が擦れる音が部屋に響く。熱い舌先が、ぷっくりと腫れた小さな突起を捉え、くるくると転がし始めた。

「あ……♡♡♡そこ、なんか……♡♡♡♡♡」

あまりの快感に頭の中がチカチカする。熱い舌先がそこを捉え、弾くように転がされるたびに、身体の奥底から痺れるような熱が突き上げて、指先までガクガクと震え出す。

「クリ……気持ちいいか？」

「クリ……?」

問い返すと、お兄ちゃんの指先がそこへ触れた。

熱い指の腹が、ぷっくりと腫れた突起をじりじりと弄り始める。

「ここだ」

そう低く呟いて、お兄ちゃんは指先でそこを、くりゆ、くりゆ、と小さな円を描くように転がした。

「ひゃあっ♡♡あ、んっ♡♡♡」

指先のわずかな動きが、ダイレクトに脳まで突き抜ける。

同時に、熱い舌先がじゅぷ、と私の入り口から中へと滑り込んできた。

くりゆ、くりゆ、と指で弄られながら、舌がぬるりと奥まで押し込まれ、じゅるじゅると吸い上げる。

「あ……っ♡♡あ、な、なに、これ……っ♡♡♡」

「いっぱい溢れてきたな……」

指先に集まってきた私の蜜をお兄ちゃんは指で掬い取ると、それを一番気持ちいいところに塗りつける。

「……ここを、こうされるの、気持ちいいだろ」

お兄ちゃんはわざとゆっくりと、指先でそこを潰すように、あるいは弾くように、執拗にくりくりゆくりゆと転がした。

くりゆ♡くりゆ♡ぬろお……♡♡

出し入れされる舌が、内側の柔らかい壁をじつくりと舐め上げ、指が上の突起を執拗に弄る。

「あ、あああ♡♡おにいちちゃん、なんか、私……おかしい、の……っ♡♡♡」

経験したことのない激しい快感に、思考がバラバラになっていく。指先が小さな突起を転がすたび、身体の芯から甘い痺れが噴き出

して、どうしていいか分からず、ただ腰を震わせてベッドのシーツを掴む。

「……おかしい？ どうおかしいんだ？」

低く、少しだけ余裕のない響き。

「わ……わかんない……なんか……んう………♡♡」

お兄ちゃんの指先は止まらない。くりゅ、くりゅ、と小さな突起をねっとり弄り、同時に熱い舌が、じゅぷつ、と奥まで突き刺さる。

「ひゃあ♡♡ あ、ん、んん♡♡♡♡」

身体が跳ね、シーツを掴んだ指先に力がこもる。

内側から押し上げられる熱い痺れが、どんどん溜まっていく。

お腹の奥がキュウツとなるような、不思議な感覚。

何か、すごいのが、来そうな予感に、私の全身はガクガクと震え

出す。

けれど、それが何なのか、どうすればいいのか、私には分からなくて、私はたまらずお兄ちゃんの肩に爪を立てた。

ぬちぬちぬちぬち♡♡じゅるるる……♡♡

「……っ♡♡あ、あ、んっ！な、なに、これ、お兄ちゃん……

♡♡♡」

熱い舌が、ぬぷぷ……とさらに深く潜り込んでくる。内側の柔らかい壁を、しつこく、激しく、撫で上げる。

同時に、上の突起を弄る指の動きが早くなった。

くりゆくりゆくりゆくりゆ……♡♡

「……お!?!♡♡そ、そこ、も、くりゆくりゆらめえ……♡♡」

「……だめ？そうは見えないけどな。ほら、こうしてると……ぷっくり膨らんできた」

お兄ちゃんの低い声が、耳元に届く。

その瞬間、指先が、一番敏感なところをぐいっと強く押し潰した。

「ひゃあああああ……ッッッ♡♡♡♡♡」

背中が大きく跳ね、足の指先までピンと伸びる。

お腹の奥が、ぎゅうう、と一層強く締め付けられ、耐えきれないほどの圧迫感が押し寄せる。

（な、なに、これ……！出ちゃう、何か、出ちゃう……っ♡♡♡）

経験したことのない感覚に、パニックで呼吸が浅くなる。

けれど、お兄ちゃんはそんなことは関係ないとばかりに、ぢゅうう……と奥の壁を強く吸い上げた。同時に、指先がその突起を弾くように、激しく、執拗にくりゆくりゆと円を描いている。

じゅるるるるる……♡♡♡

ぬちゅぬちゅぬちゅぬちゅ……♡♡♡

卑猥な水音が耳を塞ぎ、視界がチカチカと火花を散らす。

「ん、んんっ♡♡お兄ちゃん、止まってえ……！あ、やらあ、

あ……ひっ、あああ~~~~~……ッッ♡♡♡」

熱い痺れが、濁流のように身体を駆け抜ける。

腰がぐんと突き上げられ、ガクガクと震えが止まらない。

同時に、お腹の底から、じゅわああ……と熱い液体が溢れ出した。

自分の意思とは関係なく、身体がびくびくと痙攣し、シーツを濡

らすほどの大量の液体が、噴水のように溢れ出した。

ぷしやああああッッ♡♡♡

お兄ちゃんの顔にも、私の恥ずかしい体液がかかってしまった。

「……あ……お兄ちゃん……ごめんなさい……」

顔を真っ赤にして、震える手で脚を閉じようとした私の足首を、

お兄ちゃんが乱暴に掴んで左右に大きく割り開いた。

ぐちよりと、濡れそぼったシートが肌に張り付く卑猥な音が響く。
お兄ちゃんは自分の頬に飛び散った私の液体を、指でゆつくりとなぞった。そして、それをわざと私の目の前で、じゅる、と音を立てて舐めとる。

その視線は、いつもの優しくして冷静なお兄ちゃんのものではなく、どこか濁っていた。

「……ごめんなさい、じゃねえよ。こんなに濡らして……潮まで吹いて……」

お兄ちゃんは、まだ痙攣している私の秘部に、指を這わせた。

「あっ♡」

「……ふ。まだ足りないみたいだな」

お兄ちゃんは掴んでいた私の足首を放すと、私の腰をベッドの端まで強引に引き摺り寄せた。

呆然としている暇もなく、今度は膝裏をガシッと掴まれ、そのま
まぐいっと胸の方まで深く折り曲げられる。

「……っ♡♡ひゃ、あ……っ♡」

完全に晒し出された私の秘部が、お兄ちゃんの目の前で、さつき
の余韻にまだ痙攣して小刻みに震えている。

（この体勢やだ……！）

あまりの恥ずかしさに逃げようとして身をよじると、お兄ちゃん
は空いた手で私の腰をベッドに押し付け、完全に固定した。

お兄ちゃんは、私の濡れそぼった場所から目を離さなかった。

じっと、そこだけを見つめる濁った瞳に、身体の芯まで暴かれて
いる気がして、たまらなく恥ずかしい。

「……お兄ちゃんっ♡♡あ、や……そんなに见ないで……恥ずか
しいよお……っ♡」

縫るようにその名を呼ぶと、お兄ちゃんは鼻で笑った。

「……お兄ちゃん、か。そのお兄ちゃんにこうして欲しいって望んだのはお前だろ？」

低く、嘲笑うような声。

その言葉と共に、唇全体で、ぷっくりと腫れた突起を丸ごと吸い込んだ。

「ほお……!?!♡♡」

舌先で弾くだけじゃない。口全体で吸い上げられ、唇の柔らかな肉に挟まれながら、ぢゅぢゅぢゅ、と吸い上げられる。

熱い口腔に閉じ込められて、逃げ場なく蹂躪される快感に、すぐに頭の中が真っ白に染まっていく。

同時に、お兄ちゃんの指が、ぐちゅり……と私の入り口をこじ開けた。

指先が内側の柔らかい壁を強引に押し広げ、ぬぷぷ、と奥まで深く突き入れられる。

「あ……あ……っ♡♡♡」

敏感な突起に容赦なく吸い付かれる衝撃と、より熱く疼く奥へと指が入り込んでくる感覚に、思考がかき乱され、ただただピク……ピク……と、腰を跳ねさせることしかできない。

お兄ちゃん是指をさらに深く突き立てると、内側でぐりぐり激しくかき回した。

「ああっ♡♡ あ、あ、んんっ……♡♡♡」

一方で、口の中でお兄ちゃんの舌が、突起を執拗にくりくりと転がし、弾いている。

「ひゃんっ♡♡ そこ、だめ、いやあああ……ッ♡♡♡」

舌と指、二つの刺激が、私の身体をどろどろに溶かしていく。

ぐちゅぐちゅ……じゅぷ……じゅるる……♡♡♡

卑猥な水音が、静かな部屋に、いやらしく、大きく響き渡る。

快感が限界まで高まって、私はたまらず腰を後ろに引いた。

けれど、お兄ちゃんはそれを許してはくれなかった。

私の腰を両手でがっしりと掴むと、逃げられないようにベッドへ強く押し付けた。

「あ、ちよつと、待っ……！」

「待てない」

低く、余裕のない声。

そのまま、舌で突起をれろれろと執拗に舐め上げ、ぴんっぴんつと、舌先で弾く。

そして、内側に深く突き入れられた指が、猛烈な速度でかき回し始めた。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅ……♡♡♡

「ひゃっ♡♡ ああ、んあっ♡♡ おにいちゃん、それ、また……

♡♡♡」

内側の柔らかな壁を、指先が容赦なく、ぐりぐりと抉る。

快感の波が次から次へと押し寄せ、身体が再びガクガクと震え出す。

お腹の奥がキュウツとなる、あの感覚が再びやってきて、奥から熱い液体がとろとろお……と溢れ出した。

「……あー……溢れて止まんないな。お前はいつの間にこんなはしたない女になったんだ？」

低く、熱を孕んだ声が、私の身体を震わせる。

「あ……ああ♡ちが、お兄ちゃんが……♡」

「……言い訳すんな。お前のここ、こんなに欲しがってぐちゅぐちゅ

ゆ鳴いてんだろ」

嘲笑うような声と共に、指が一番敏感なところを抉るように、ぐりぐりいい……と、強烈に抉り上げた。

「あああああ~~~~~……ッッッ♡♡♡」

絶叫と共に、身体がぴいんと、跳ね上がる。

M字に割られたまま、胸を大きく反らせてピクピクと痙攣する。

ぴゅっ、ぴゅるるる……♡♡♡

お腹の底から、熱い液体が勢いよく飛び出した。

お兄ちゃんはそれを逃さず、長く出した舌でれえ、と受け止めている。

「おお……!?!♡♡♡」

自分の液体を、目の前でお兄ちゃんに飲み干されるとい、う、ありえないほどの恥ずかしさと快感。

「飲まないでえ……!」

「お前がお漏らしするからだろ？」

ぶつきらぼうに言い捨てると同時に、お兄ちゃんは再び指を深く突き入れ、激しくかき回した。

「あぁっ♡♡あ、あ、んんっ……♡♡♡」

(……足りない)

指でかき回される快感の裏側で、さっきからずっと身体の奥底が飢えたように疼く。

(……お兄ちゃんが欲しい……中を、全部、お兄ちゃんに埋めてほしい)

恥ずかしさなんて、もうどうでもいい。

ただ、お兄ちゃんに全部を満たされたくて、私はたまらず、喉を震わせて懇願した。

「……お兄ちゃん、お願い……入れて……♡」

それまで何を言っても止まらなかったお兄ちゃんの動きがピタリと止まる。

お兄ちゃんの視線が、いままで弄ばれていた秘部へと注がれる。

濡れそぼり、赤く腫れ上がったそこを、お兄ちゃんはただじっと見つめていた。

心臓がうるさい。期待で、胸がはちきれそうになる。

（……私……お兄ちゃんと……）

でも、お兄ちゃんは、力なく首を振った。

「……それだけは……ダメだ」

お兄ちゃんは眉を寄せ、何かを必死に堪えるような、切なげな表情だった。

そして——お兄ちゃんは再び、指を私の奥へと深く沈める。

「あ、あおっ♡♡」

さつきよりも乱暴な、かき回すような刺激。指先が、私の内壁を執拗に、挟るように擦り上げる。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅうううう♡♡♡♡

「……あ、やだ、お兄ちゃんが……ほしいよお……！♡♡」

もう指じゃ足りない。そんな私の懇願を無視して、お兄ちゃんはまだ指を動かし続ける。

薬のせいで、熱い。頭の中が真っ白で、身体中の細胞がお兄ちゃんを欲して叫んでいる。

「おにい、ちゃん……お願い、いれてえ……っ♡」

涙で視界が滲む。もどかしくて、たまらない。

私は、もがくようにして手を伸ばした。

お兄ちゃんのベルトのあたりに触る。さわさわと手の感覚だけで

探す。

そうすると、指先に、熱くて、硬い塊が触れた。

それは、拒絶とは裏腹に、はつきりと、猛々しく昂っている。

その確かな硬さに触れた瞬間、期待がさらに膨れ上がる。

（……お兄ちゃんも、興奮してる……？ 私に……？）

私はそれを、自分の熱いところへと導こうと、お兄ちゃんの腰をぐい、と自分の方へ引き寄せた。

けれど、お兄ちゃんは私の手首を、強い力で掴んで制した。

「……っ」

お兄ちゃんの呼吸が、さっきまでとは違って、荒くなっているのがわかる。

掴まれた手首から、彼の体温が伝わってくる。

お兄ちゃんは、私の腕を掴んだまま、あえて腰を逃がした。

そして、また指を、深く、最奥まで突き入れる。

「ああっ♡♡ んんっ、あぁああっ……♡なんであ……？なん
で入れてくれないのお……!？」

涙ながらに問いかける私の言葉に、お兄ちゃんが低く、掠れた声を漏らした。

「……お前は妹だ。恋人じゃない」

心臓を冷たい水で洗われたような衝撃が走る。

あんなに激しく弄ばれて、身体はこんなに欲しがっているのに。
それでも、やっぱりお兄ちゃんは残酷なまでに線を引くんだ。

「でもっ……お兄ちゃんだって……さっき、触って……こんなに、
硬くなってるのに……っ♡」

掴まれた手首を震わせ、私は必死に食い下がった。

触れたあの熱さを、忘れられない。

お兄ちゃんも私を女として見ているはずだ。そう信じたい。

けれど、お兄ちゃんは私の言葉を、突き放すように言い切った。

「……これは生理現象だ。お前を女として意識しているわけじゃない」

嘘だ。

嘘であつて。そんな言葉、信じたくない。

だって、お兄ちゃんが私を掴む手は、さっきからずっと震えている。

私を突き放そうとする理性の裏側で、お兄ちゃんの身体も、限界まで昂っているんだ。

そう、思い込もうとしたが、私を見下ろすお兄ちゃんの瞳は、冷たく、空っぽだった。

そこには熱い情動も、揺らぎもない。ただ、妹に手を焼く兄とし

ての、諦めだけが静かに沈んでいる。

さっきまで感じていた「昂り」は、ただの身体的な反応に過ぎなかったのだと、突きつけられた気がした。

お兄ちゃんは、私の身体を女として欲しているわけじゃない。ただ、目の前で乱れている妹を、義務感から宥めようとしているだけ。（……どこまでいっても、私の一方通行なんだ……）

どれだけ私を気持ちよくしようとしてくれていたとしても、お兄ちゃんの心は一ミリも動いていない。

私は、ただの「面倒な妹」のまま。

兄としての義務感から、仕方なく慰めてくれるだけなんだ。

こんな恋人ごっこをしたところで、決して超えられない境界線が、冷酷なまでにそこに横たわっていた。

「……私のこと……妹以上には見れないんだね……」

漏れ出した私の言葉に、お兄ちゃんがふっと視線を逸らした。唇をぎゅっと結んで、そのまま黙り込む。

「……ああ」

短く、突き放すような答え。

けれど、その声はどこか掠れていた。

お兄ちゃんは私の手首を離すと、再びその指を、私の秘部へと深く沈めた。

さっきまでとは違う。

優しさも、気遣いも、すべて捨て去ったような、乱暴な動き。

指が内壁を強引に押し広げ、最奥を抉るように突き上げられる。

「あ、いや、あ……あああッッッ♡♡」

悲しくて、涙が溢れて止まらないのに、それとは裏腹に、快感に身体は跳ね上がる。

お兄ちゃんは、私の肩足を持ち上げ、晒されたそこへと顔を埋めた。

熱い舌が、吸い付くように、貪るように、私のすべてを舐め尽くしていく。

ぐちゅぐちゅ……じゅる……という淫らな音が、静かな部屋に響き渡る。

あまりに激しい刺激に、意識が白濁する。

（やだ……こんなの……悲しいだけなのに……気持ちいいなんて……）

心はこんなに冷え切っているのに。

お兄ちゃんに拒絶されて、絶望しているのに。

薬のせいで、身体だけは正直に、甘い快楽に溺れていく。

舌先が一番敏感な場所を弾くたびに、身体がぴくんと跳ね、熱い

液体がとめどなく溢れ出した。

絶頂が、すぐそこまで迫っている。

けれど、どれだけ激しく突き上げられても、どれだけ淫らに舐め回されても、私の想いに、お兄ちゃんが応えることはない。

ただ身体だけが、得体のしれない快感に翻弄されて、虚しく震え続けていた。

お兄ちゃんは、私の太ももを掴むと、そのままぐい、と持ち上げた。

私の両脚が、お兄ちゃんの肩に深く掛けられる。

腰がベッドからふわりと浮き上がり、お兄ちゃんの顔の前に、私のすべてが晒された。

逃げ場のない、無防備な格好。

ぐちぐちぐちぐち……ぢゅぢゅぢゅうううッッッ
♡♡

舌先で執拗に弄り回されるたびに、薬で敏感になった身体がびくんと大きく跳ねる。

（お兄ちゃん……お願い、お願い……っ、こっちを……見て……っ！）

心の中で叫んでいるのに、お兄ちゃんの視線は私の顔ではなく、ただ、私の濡れそぼった秘部だけを見つめていた。

義務感から、とにかく私を気持ちよくさせて終わらせようとしているのがわかって、胸が締め付けられた。

お兄ちゃんは舌を離すと、今度は指を、深く、最奥まで突き入れた。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅううううッッ♡♡♡

じゅるるるるッッ♡♡

内壁を激しくかき回され、溢れ出た蜜を執拗に舐めまわし、吸い

上げられる。

ガクガクと、太ももが震え出す。視界が火花を散らしたように白く弾け、呼吸が止まった。

「……っ♡♡　いくっ、いっちやう……あ……あああぁぁぁ……
…ッッッ!!♡♡♡」

身体が、弓なりに大きく跳ね上がる。

ぴゅるるるうう……じゅぶぶぶっ……!!♡♡

熱い液体が、抑えきれずに噴水のように勢いよく飛び出した。

けれど、お兄ちゃんはそのを避けることなく、私の腿をしつかりと掴んだまま、溢れ出た愛液に濡れた秘部を、根こそぎ舐め尽くすように舌を這わせた。

私の恥ずかしい体液を、喉を鳴らして、一滴残らず飲み干していく。

じゅる、じゅるるうう……ッッッ♡♡♡

「おお……♡♡」

すべてを啜り尽くしたお兄ちゃんが、ふう、と熱い息を吐く。

その吐息さえも、今の私には、面倒な作業をようやく終えたあとの、溜息のようにしか聞こえなかった。

空っぽになった身体と、満たされない心。

激しい快感に溺れたあとに残ったのは、ひどく、惨めな、孤独だった。

朝、目が覚めると、そこは見覚えのない白い天井だった。

清潔な白いシーツに包まれ、カーテン越しに差し込む淡い朝日が

部屋を照らしている。お兄ちゃんの部屋だということをすぐに思い出した。

意識がはつきりするにつれ、昨夜の出来事が濁流のように押し寄せてきた。

薬を盛られたこと、パニックになってお兄ちゃんに電話したこと、タクシーでここに来たこと。

熱い口付けと、執拗に触れた指。お兄ちゃんの舌に何度も翻弄され、身体が跳ね上がるほどイカされた記憶。自分でも制御できないほどの快感に、何度もよくわからない液体を噴き出した、恥ずかしい記憶。

——けれど、最後までは、してくれなかった。

身にまよっているのは、お兄ちゃんのTシャツだった。大きすぎる裾が肩から落ち、そこからお兄ちゃんの匂いがふわりと漂う。

(……お兄ちゃん……)

身体を起こすと、足の間に微かな疼きが残り、太腿の力が抜けていた。

ベッドから降りて、寢室のドアをそっと開ける。リビングではお兄ちゃんがソファに座ってスマホを眺めていた。その横には畳まれたブランケットが置かれている。

(……お兄ちゃん、あそこで寝たんだ)

足音に気づいたお兄ちゃんが、こちらを見た。

「起きたか」

「……うん」

「気持ち悪いとか、ないか」

「……ない」

「そうか」

お兄ちゃんはすぐに立ち上がると、キッチンから水を入れたコップを持ってきて私の前に差し出した。

「飲め」

「……ありがとう」

冷たい水を飲み干すと、重い沈黙が降りてきた。昨夜のような、肌が張り詰めるような緊迫感ではない。ただ、ひどく気まずいだけの沈黙だった。

「……家まで送る」

「平気、自分で帰れる」

「送る」

一言で切り捨てられた。反論を許さない、いつものぶっきらぼうな声。

私は自分の服に着替えた。昨夜のブラウスとスカート。お兄ちゃん

んのTシャツを脱いで、丁寧に畳んでベッドに置く。

タクシーに乗せてもらうと、お兄ちゃんが実家の住所を告げた。

車内は無言だった。昨夜のように腕を掴まれることもなく、隣に座っているのに、お兄ちゃんとの距離は気が遠くなるほどに遠い。

昨夜の手の感触を思い出す。太腿を押さえた手の強さ、内壁を掻き回した指。意識が飛ぶほどイカされて、潮を吹いて、それを全部飲み干された。

——それでも、お兄ちゃんは私のお願いを聞き入れることはなかった。

何度も絶頂まで連れて行ってくれておきながら、お兄ちゃんは硬くなった自分のものを私に入れなかった。

（——……兄として、線を引いたんだよね……）

その意味を考えると、胸にじわりと広がった。

指と舌は、お兄ちゃんの中で「ぎりぎり許容できる範囲」だったのだろう。薬のせいでまともじゃない血の繋がらない妹が縋ってき
て、抱いてほしいと泣いたから、仕方なく応えただけ。でも、最後
の一線だけは越えなかった。

それが、お兄ちゃんにとっての「兄としての責任」だったのだと
思う。

（——やっぱり、お兄ちゃんにとってはただの妹なんだ。私は）
それが、お兄ちゃんからの残酷な答えだった。

タクシーが実家の前に着き、お兄ちゃんが料金を払って車を降り
た。私もそれに続く。

玄関の前で向き合ったとき、私は精一杯の声を絞り出した。

「……ありがとう、昨日は」

「ん」

「助けてくれて」

「……兄として放置できなかった……悪かったな」

——兄として。

胸の奥で、ぱきっ、と何かが割れる音がした。四年前、展望台で振られたときと同じ音。

でも、不思議と笑えた。

「ううん、なんでお兄ちゃんが謝るの？ありがとう……お兄ちゃん」

そう言って笑い、家の中に入った。

玄関のドアを閉めた後、靴を脱ぐ手が小刻みに震えていた。

自分の部屋に戻り、ベッドに倒れ込んで、枕に顔を埋めた。

堪えていたものが溢れ出し、声を殺して、ぐちゃぐちゃに顔を押し付けて泣いた。

（——わかってた。わかってたのに）

お兄ちゃんは兄として助けてくれて、兄としてぎりぎりの線で止めてくれて、兄として家に送り届けてくれた。

全部、兄としてなんだ。

あの絶頂も、あの舌も、あの指も——全部、兄としての義務感。

涙が止まらず、枕がびしょびしょに濡れた。

泣いて、泣いて、泣き疲れて、私はそのまま泥のような眠りに落ちていった。